

# Goblin Princess

ようつう

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——もはや彼らを縛る『鎖／呪い』は無い。

# 目次

P  
r  
o  
l  
o  
g  
u  
e  
;  
b  
i  
r  
t  
h  
|  
1



## p r o l o g u e ; b i r t h

——遠い遠いどこかの世界。

神々が、<sup>ダイス</sup>賽子を投げるその盤<sup>世界</sup>上で。

それは、生まれた。

---

人間の手の及ばぬ森林の奥深く、打ち捨てられ、今や森の一部に飲み込まれようとしている古い砦。

その砦を我が物顔で闊歩するのは、人類種に『ゴブリン』と呼ばれる者達だった。

彼らは、この世界に蔓延る同種たちの中でもひとときわ大きな群れで、周囲の村々を襲つては、略奪と蹂躪を繰り返し、その力を増していた。

彼らの群長、王はその精強な体躯からくる『畏怖』だけではなく、本来ならゴブリンには芽生え得ない『尊敬』と『崇拜』とによつて群をまとめ、数多くの戦果を手にしてきた。

そんな王が、いつになく落ち着かない様子でいる。

いつもなら、砦に設けられた玉座に腰かけているか、地下につながれている人間の雌孕み袋の相手をするところだが、砦の通路、ある一室を右往左往としていた。

その部屋は王にとって特別な雌オシナのいる部屋。

彼がまだ王になる前に捕えた雌オシナ。

彼を王にするために知恵を吹き込んだ雌オシナ。

彼に心を、意志を植え付けた雌オシナ。

それは王にとっては不思議な雌オシナだった。

雌オシナは自分を嫌悪しなかった。

雌オシナは自分をアイシテくれた。

雌オシナは自分と交わつてもなかなか仔を孕まなかった。

王は雌オシナを殊更丁重に扱った。

他の有象無象には指一本触れさせず、雌オシナの為に住居まで整えた。

自身の内より湧き出る『わけのわからないナニカ』に突き動かされるがままに行動した。

——その雌オシナが、いま自分との仔を生もうとしている。

それは予感。

王が漠然と感じ取ったもの。

自分が王となつてから知つた、自分たちの欠落。

その欠落を埋める存在の誕生。

自分と雌オシメとの仔が、自分たちの希望となるだろう、ということ。

そして、一刻か、二刻か、あるいはもつとか。

天頂にあつた陽が傾き、空が茜に染まり始めたころ。

『彼女』は誕生した。

---

その女は、周囲から『聖女』と呼ばれていた。

森の縁にある、辺境の小さな村。

そこにある教会に勤める『女神官』の一人。

彼女は誰にでも平等に優しく、慈愛と救済を与え、高潔な精神を持つていた。彼女は生まれつき多くのものが視えた。

相手の思考や精神、物事の流れ、あるいは『運命』と呼ばれるモノまで。

だから彼女は他人の求めるものや、求める救いのカタチを的確に理解できた。その人物の欠けている部分、『欠落』を埋める。

そうすることで、彼女は周りの人々を救つて回つた。

彼女は誰からも慕われ、聖女として称えられた。

彼女は優しかった。

その慈愛は万物に平等に向けられた。

だから自分の運命、小鬼たちに襲撃されることを知つたときに、彼女が真つ先に抱いたのは、『ワタシが彼らを救わなければ』という思いであつた。

彼女の眼には、彼らは余りにも歪な、欠けた存在として映つた。

それは、隣人たちの抱えるそれとは比べ物にならないほどに深刻な『欠落』。

『欠落』は、救済の対象。

彼女にとって彼らの『欠落』は、『救済を求める声』は、決して看過できるものではなかつた。



そして、襲撃の夜。

村人たちを避難させ、一人残った彼女は、やって来た小鬼たちと共にその姿を消した。

彼女は、まず手始めに襲撃に来た群のリーダーに『知恵』を与えた。

小鬼という種にかけられた制約呪い、それが彼ら自身の知性を低級のままに抑制していることを『視た』彼女は、その呪縛を取り払う。

『彼』は、聖女の有用性を認識すると、その利を自分以外に与えないために自分以外の小鬼と聖女とを隔離した。

彼女はその後、彼が望むままに知恵を与える。

群の統率の仕方、王としての振る舞い。

個として非力な彼らがより安全に生き残るための工夫。

最初は小規模だった群も、彼の力、そして知恵によってより大きく、豊かになった。

また、彼女は彼に惜しめない愛情を与えた。

体を求められた時も、不思議と嫌悪は無かった。

彼女にとって彼、ひいては彼らは救うべき対象であつて、嫌悪の対象ではなかったのだ。

幸い、彼の庇護下にあるため、群の全員を相手にする必要はない。

王となつた彼の求めるままに、全靈の愛を与えた。

そして、彼女は彼らの最後にして最大の『欠落』を埋めるために行動する。すなわち彼らの根本的欠落、種としての欠陥。

そう、彼女は王との間に『娘』を生むことを決意した。

これは『見通す眼』を持つ彼女でも難しいことだった。

まず、王と交わるたびに生まれる胎内の胚を、分解し精査する。

幾度の試行の果てに、ようやく小鬼という種の構成要件を理解すると、今度はそこに『不足』しているモノを、自身の身体から付け加え再構成する。

付け加え、分解し、失敗すれば条件を変えて再試行する。

試行を続けて数年。

ついに彼女の、そして彼らの『娘』が誕生した。

---

その日は彼らにとって忘れられない日となるだろう。

彼らの王と、その寵姫との間に生まれた新たな命。

それは、それまで彼らが成してきた仔とは異なる。

母体の特徴を多分に引き継いだ美しいその子は、彼らゴブリンという種の希望の子。

ここに、歴史上初めての小鬼ゴブリンの雌個体、彼らの姫、小鬼ゴブリンプリンセスが誕生した。